

## 「JENESYS2.0」第二十二回中国教育関係者代表団

### 参加者の感想（抜粋）

○ 今回の訪問で、日本の教育制度の歴史と変遷について理解を深めた。東京の文部科学省での『新しい学習指導要領の考え方』というブリーフィングでは、日本のいま現在における最新の理念を知ることができ、二つの学校訪問では、日本の日頃の学習指導面での運営や管理について、じかに触れることができた。日本の教育の進んでいる点は、理念の先進性だけにあるのではない。理念の実践こそがより重要なのである。堅実に、一步一步具体的な取り組みで確実にその理念を実現していく、これが日本の教育が着実に発展してきたキーポイントにほかならない。

○ 私にとって初めての日本との「深い触れ合い」だった。私たちは、東京と大阪で行政の教育部門の講義を受けたほか、二つの学校を訪問した。これらのプログラムを通じ、私は日本がいかに教育を重視しているかを知った。少年が強いということは即ち国が強いということだ、とよく言われるが、少年を強くするのは教育にほかならない。以下、印象深かったことについて記しておきたい。

まず一つ目は、社会の先輩たちが子どもたちに日本人としての心を伝えようとしている点だ。例えば、日本人の環境を守ろうという姿勢は、大いなる自然への畏敬の念から発しているものだが、その取り組みの一つに細かなゴミの分別がある。台東区立柏葉中学校を訪問した際、生徒たちと同じ給食を体験した時のことだ。食べ終わった後、PTAのボランティアのお母さんたちが私たちにゴミの分け方を一つひとつ教えてくれたのだが、私は自分の席からこんな場面を目にした。PTAの方が皆の飲み終えた牛乳パックを一つずつ丁寧に開き、積み重ねていた時、同席されていた東京都教育庁の方がとても自然に歩み寄り、それを手伝い始めたのだ。大人たち全員のこうした影響のもと、子どもたちは当たり前のようにこれを習慣とし、環境を守ろうという意識が芽生え、ひいては大いなる自然に対して知らず知らずのうちに畏敬の念を覚えるようになる。これこそが日本人の心の継承であり、生きたお手本による教育の力というものではないだろうか。

二つ目は、日本の国づくりに不可欠な資質を子どもたちが身につけられるよう学校カリキュラムが組まれていることである。例えば、伝統文化への理解と体験は、日本人であることに誇りを抱かせるものだし、「人権教育」は生徒に愛と自尊心を学ばせるためのものだった。カリキュラムの選択であれ、その改革であれ、立脚点はいま現在だけにとどまらず、10年・20年先の社会を見据えてのものなのである。

以上のことは、私が帰国後、周囲に伝え、実施していきたいことでもある。

○ とても心に残る数日間の訪問だった。特に印象深かったのは、日本の特別支援教育システムのことである。特別支援学校のほか、特別支援学級、通級指導教室があり、障害の種別や状態によって区分され体制化されていた。

とりわけ、特別支援学級と通級指導は参考になったし、我々も取り入れてみるべきだと感じた。特別な支援を要する生徒に向けた、その子に合った教育を受けさせられると同時に、健常な生徒らと触れ合い、交わる機会も多く持たせることができる。その上、

健全な生徒にも、障害を持つ生徒に対する直観的な理解を促し、互いの共生や平等について考えさせることができるものだからだ。

私自身は特別支援教育の教員ではないが、平等の実現や他人への尊重、自分に自信を持つこと、偏見や差別をなくすこと、そしてより良い人間関係を築くこと、これらのことは皆、教育が目指す目標にほかならない。台東区立柏葉中学校で人権教育がカリキュラムに組み込まれていたように、また文部科学省のブリーフにもあったように、子どもたちにどう社会や世界と深く関わり、より良い人生を築いていくかを学ばせること、それが中日両国における教育の目的なのである。

○ 私が訪問した東京の中央区立泰明小学校と大阪市立南高等学校には、ある共通の特徴があった。在校生の数が少なく、一クラス少人数であることだ。このことは、教育資源の利用と配分という点でより高い効果が望める。適材適所の教育、目的や対象を絞った活動が可能となる上、一人ひとりの子どもに教員が十分目配りできるということは、生徒のより良い成長へとつながっていく。

他にも、学校教育と社会における教育資源の緊密な連携、つまり国としての制度から地域社会におけるさまざまな団体や個人の自発的な参画に至るまで、全てが国民の教育を大いに下支えしている点である。

帰国後、私はこうした日本の教育の成果、そして日本の街から窺がわれる民度の高さや文化の継承について同僚や友人たちに伝え、もっと日本を知り、日本をわかってもらいたいと思っている。

○ 今回私は中国教育関係者代表団の一員として交流のため日本を訪れ、二つの学校を訪問した。校門をくぐると、まず目に入ってきたのは、子どもたちが薄着のまま元気に校庭を走り回る姿だった。わずかでも寒そうな顔をしている子など一人もいない。日本では生徒には決まった制服があるとのことだが、小学校の場合はまちまちだそう。ただ制服のあるなしに関わらず、「薄着で」という考えは日本の保護者にとっては当たり前のことらしい。以前ある日本の保護者がその意義についてこう話すのを聞いたことがある。「日本では、子どもに一年中薄着をさせるよう学校に言われる。寒さに慣れさせるためだ。というのも、成長期にある子どもの体は常に遊びたくてうずうずしており、片時もじっとしていないため、比較的寒くても平気である。こうして我慢を続けることで、寒さに対する耐性が一段と高まり、強い身体へと鍛えられていくのだ」と。

また、大阪市教育委員会との懇談会で、全ての子ども一人ひとりの学力を伸ばすと同時に、独立した人格を有する個としての自分を確立し、他人と力を合わせ、これからの社会を担っていけるよう健やかに育てていく、という考え方を知った。こうしたさまざまな教育理念について周りの教育者らと分かち合い、共に未来を切り拓いていけるような、広くて強い心を持った人材育成に努力していこうと思う。

○ 中国と日本は海を挟んで向き合う一衣帯水の位置にあり、お互いの容姿、ファッション、生活習慣に至るまで似ているところが多々ある。もちろん、教育における共通点や類似性は、こうした教育以外の要素だけでなく、それ以上に教育そのものにある要素

が大きい。つまり教育の進歩それ自体に宿る法則が、両国の教育に共通性をもたらす決定的な働きをしている。今回の視察を通して、日本は先進国でありながら、教育分野では依然として教育の基本のような素朴で真面目なスタイルを保持し続けていること、そして現代的な授業補助具もさほど使われていないことを知った。このことは、教育の実践の場においては自由度を確保できるということでもある。他にも、日本は生活リズムが早い割には、教育においては実にきっちりと丁寧であり、仕事は完璧になされ、子どもたちはあらゆる面で尊重され、大切にされていることが分かった。

帰国後は、自分の見聞きしたことを地元の教育委員会、校長や同僚教員たちに報告したいと思う。更には子どもたちを連れて中国を飛び出し、彼ら自身に日本を体感させてあげたい！そしてどこかふさわしい学校を見つけて姉妹提携を結び、中日交流そして中日青少年交流に貢献していきたいと願っている。

○ 4日間のプログラムでは多くの収穫があったが、最も印象に残ったのは、好ましい教育環境が構築され、全ての人に支えられた教育が行われていたことである。学校では地域住民に、講座や学習サポート、ボランティアなどの形で授業に加わってもらっている。また小学生の下校時間になると、地域の無線放送で生徒の下校が伝えられ、近所のお年寄りが道路に出て子どもたちの見守りに参加してくれたりもする。教育というのは、社会・学校・家庭の三者の協力が不可欠だ。共に頑張っこそ、子どもたちの健やかで楽しい成長を実現できるのである。

○ 今回の日本訪問により、日本の教育理念と学校での具体的な取り組みについて知ることができた。その中には私の勤務する小学校の理念と共通する部分が多く含まれているように思われた。例えば、生徒の通貫型教育である。一つの教科だけに特化した教え方の殻を打ち破り、複数教科を跨いで「テーマ学習」などの教育活動を行っていることである。

中日両国は、政治、経済、文化、そして国情などが異なるため、具体的なやり方にもそれぞれ違いがある。今回のように日本との至近距離での交流は、私たち現場の教員にとって視野を広げる機会となり、中国人としての自信を深めると同時に、普段の仕事において何を大事に持ち続けるべきなのか、そして何を变えていかねばならないのかを考えさせられた。

○ 私は、日本は真の意味で教育のための教育を行っていると感じた。学校や教員、授業内容に対する評価のものさしが、学習到達度テストの成績だけではないということ、これは日本の公立学校の大きな特徴である。そしてこのことは、混沌とした社会にあって、教育のために自由で安全な地を切り拓いていく上で最も大切な前提条件でもある。私としては、こうした将来を見据えた教育視点に立ったトップダウン方式は、中国の一部地域でも試してみる価値があるのではないかと考えている。

○ 今回の学校訪問で、日本の生徒たちのはつらつとした明るさや、海外からの訪問客に対しても親しげに挨拶する姿、自信と光にあふれた眼差しに触れることができた。感

動したのは、学校内の整理整頓と生徒の元気の良さが共存していたことである。校門前の階段には生徒らの手によるアニメ作品がペイントされているかと思えば、廊下や通路、教室内の机、本棚は清潔に整えられている。これらは全て、この学校の生徒たちの生き生きとした日々の様子と、きちんとした生活態度の表れであろうと思われた。また、学習上の特別支援を必要とする生徒には一対一での個別授業が行われていた。教員の生徒を思う心と生徒の学習に対する真剣な姿勢がそこにはあり、深い感銘を受けた。